様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１２９８８

研究課題名（和文）ヴォーリズの諸活動にみる音楽の諸相―日本の教養としての音楽文化を考える―

研究課題名（英文）Music Activities in Omi Mission launched by W. M. Vories: A Musicological Case Study on liberal arts in Japan

研究代表者
齊藤　紀子（SAITO, Noriko）

お茶の水女子大学・基幹研究院・基幹研究院研究員

研究者番号：６０７６９７３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　近江兄弟社や洋風建築で知られるW. M. ヴォーリズは米国から英語科教員として来日した。数年で教職を退き、滋賀県近江八幡市を拠点に様々な活動を行った。音楽学の立場から教育関連の事業における音楽を調査し、既往研究とは異なるヴォーリズ像を提示することを目指した。
　だが、本課題の主要な成果はむしろ、同時代の日本の革新的な教育実践が海外の支援者向けに報告されていたこと、教育活動のすべてが必ずしもヴォーリズの発案によるわけではなく、一柳満喜子ヴォーリズ夫人など高等教育を受け訪米経験もある日本人女性が共に活動したことの二点について具体的に明らかとなったことにある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ヴォーリズの周囲には、自身の目でアメリカを見た経験のある日本人もいたことが具体的に明らかとなった。日本人の動向も視野に洋楽受容そのものを捉え直すことに学術的意義がある。
　ヴォーリズが日本の家庭向けに販売した米国の小型ピアノ（ミーズナー・ピアノ）は、米国の音楽科成立時に郊外の小規模校でも音楽教育を実現するべく考案され、音楽教育会議で発表された教育楽器であることが明らかとなった。そこを起点に約1世紀の歴史ある米国の「グループ・ピアノ」（とくに大学で音楽を専攻しない学生を対象に開講される授業科目）を調査へと発展させ、日本の大学における教養教育や社会教育に活かすことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to propose how W. M. Vories cultivate Japanese people through music. Vories came to Japan as an English teacher from United States. A few years later, he resigned from public school, and launched Omi Mission. Omi Mission, later Omi Brotherhood Ltd. planned various educational activities, such as nursery, kindergarten, summer schools, school in factory, and so on.
　Three surveys consist of this investigation: (a) music practices in various activities recorded primary resources, (b) reports on various activities to abroad and in Japan, and (c) Vories’s experiments in the United States and concern for educational movements in the United State and Japan.
　This research achieved two significant results: (1) reports to abroad on contemporary innovative educational practices in Japan, and (2) educational proposals at some Japanese suggestions, especially HITOTSUYANAGI Makiko, Vories's wife.

研究分野：音楽学

キーワード：W. M. ヴォーリズ　音楽　リベラル・アーツ　教養　O. ミーズナー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

背景・動機

学術的背景

ヴォーリズの研究は従来、建築文化史（山形政昭らによる）やキリスト教文化史（大橋二郎他）の枠組みで構築されてきた。研究代表者は、建築技法に加え、建物内部で営まれる生活にも着目する山形の研究を参照しながら、「日本の洋楽受容史におけるアメリカの影響―ヴォーリズ建築にみるピアノの普及―」（JSPS 科研費「若手研究」JP16K16717）を通して音楽学の立場からヴォーリズを調査することを試みた。ヴォーリズの自伝を読み、出身校コロラド・カレッジで在学当時の学生生活を調査したところ、ヴォーリズ建築は当時のアメリカの建築文化の潮流ばかりではなく、世紀転換期の新教育運動や生活文化の影響も受けていることが明らかとなった。建築設計以外の活動も視野に入れ、ヴォーリズが日本で展開した諸活動全体をヴォーリズ自身の学生生活や経験をもとに構想され、日米の教育や文化をめぐる動向とも関連するものとしてより精確に捉え直す。

動機

上記の科研費課題の調査を進めるなかで、ヴォーリズが音楽によって「教養ある人格を造る」ことができると考え、アメリカの大学で受けたリベラルアーツ教育にもとづいて、幼児や青年、婦人、工員など様々な立場の日本人に教育的活動を行っていた可能性が浮かびあがった。洋風建築の内部で営まれた生活、そこにとり入れられた人として豊かに生きるための音楽を広義の教育の視点から考察する。そうすることにより、ヴォーリズが日本で行った諸活動をより精確に捉え、日本の音楽教育史とも関連する新たなヴォーリズ像を提示することができると考えた。

２．研究の目的

ヴォーリズが日本で手がけた諸活動において、「教養ある人格を造る」１つの手段として音楽が位置づけられていたことを踏まえ、これまでの調査で着目していた建築設計活動に加え、教育活動における音楽のありようとその背景に焦点をあてて調査し、洋風建築設計者として築かれてきたヴォーリズ研究に、日本人の生活面・文化面での教化を計ったヴォーリズ像を提示することを目ざす。正課教育というよりは人としてよりよい生活を送ることを説くために実践された様々な教育活動とそこで用いられた音楽に関するこの調査に着手することは、上記の目的を果たすと同時に、分断されがちな音楽学と音楽教育学の領域にまたがるものとして音楽文化をみることになり、これまで十分に論じられてこなかった教養教育、社会教育としての音楽教育を学術的に調査し、演奏のうえでも鑑賞のうえでも多様化する今日の音楽文化のあり方や今後の広め方を模索する契機となると考えている。

３．研究の方法

方法の具体的内容

次の 3 つを柱とする文献資料調査を行う。

①ヴォーリズの様々な活動の記録資料における音楽の位置づけと演奏実践の具体事例

本課題で一定の分量を得られたが、所蔵先が整理・分析中とするなど、未確認の資料も残った。

②国内外に向けて報告されたヴォーリズの活動と音楽実践

国内向けの機関誌『湖畔の聲』と欧米の支援者向けの活動報告『Omi Mustard Seed』の現存するバックナンバーを調査した。後者は COVID-19 の経過措置で閲覧可能時間が限られる中、別室の利用、複写の許可などボストン大学の多大な協力を得た。主な成果につながる。

③アメリカでの学習・生活経験と来日後の日米の教育や文化をめぐる情報収集

現存する一次史料や著述を収集した。だが、ヴォーリズ自身の経験がヴォーリズの諸活動の構想に影響したことは明らかであるのに対し、来日後の情報収集については、米国や日本の同時代の特定の教育機関と密接な関係や関連があったと結論づけるのは早急であると判断せざるを得ない。むしろ、何か一つの明白な教育モデルがあったというよりは、同時代の様々な情報や実践事例がコラージュのようにとり入れられている可能性も考えられる。

COVID-19 を受けて調査期間を 2 年延長した。また、米国の大学が所蔵する貴重資料の閲覧受付時間の短縮を受け、渡航を伴う調査の規模を縮小した。米国での調査は、2019 年度にコロラド州のコロラド・スプリングスとデンバー、議会図書館（ワシントン D. C. ）で、2022 年度にボストン大学とメリーランド大学、イェール大学、ブリン・マー大学で、2023 年度にコロンビア大学と同ティーチャーズ・カレッジ、ジュリアード音楽院で行った。

なお、早稲田奉仕園スコットホールでの開催を計画したシンポジウムは、COVID-19 で調査が計画通りに進まなかったことを受けて断念し、調査そのものの遂行を優先させた。

４．研究成果

主な成果

COVID-19 の影響で滋賀県近江八幡市内並びに米国での調査を予定通りに行えなかった間、所属する米国 National Association for Music Education の会員権を利用し、日本国内からアクセスできる音楽教育関連の資料を調査した。

ヴォーリズが日本の家庭向けに販売していた米国の小型ピアノが同国の音楽教育の改革期に音楽科教員によって考案されたものであることが明らかとなった。日本音楽教育学会や大正イマジュリィ学会の学会誌を通じて研究論文を発表した。

『Omi Mustard Seed』の現存するバックナンバーの調査から、同時代の日本の革新的な教育実践が海外の支援者向けに報告されていたこと、教育活動のすべてが必ずしもヴォーリズの発案によるわけではなく、一柳満喜子ヴォーリズ夫人など高等教育を受け訪米経験もある日本人女性が共に活動したことの二点について具体的に明らかとなったことが明らかとなった。2022 年と 2023 年に日本音楽学会の大会で口頭発表を行った。

得られた成果の国内外におけるインパクト

日本では西洋音楽の受容にあたり、キリスト教（讃美歌）、公教育（唱歌）、軍隊（軍楽隊）の 3 つが窓口となったとするのが音楽学研究の定説となっている。本課題の調査対象である近江ミッション（現在の近江兄弟社）は、宣教師ではないヴォーリズという一個人が日本で出会った人びとと協力して開き、活動を展開した。先に挙げた 3 つのマクロな視点とは異なるものの、キリスト教や学校教育と関連があり、独自の展開を見せた団体の調査として位置づけられる。実際に、記録資料などの調査から得られた集会のプログラムにおける奏楽、行事における音楽などの具体的事例は、どのような場に人が集い、他のどのような活動の中に奏楽が位置づけられるのか、これまでの洋楽受容史にはない音楽文化活動の視点を投じる。所属する学会を通じて本研究で得られた成果を公表していく。

直近の予定としては、海外での研究活動として 2024 年 9 月に米国ジョージア州アトランタで開催される National Association for Music Education の大会に研究発表を申し込み、音楽教育史研究部門でポスター発表をする機会を得た。海外の研究者から得たフォードバックを踏まえ、研究論文（英文）の執筆に取り組む。

今後の展望

ヴォーリズが日本の家庭向けに販売した米国の小型ピアノ（ミーズナー・ピアノ）は、米国の音楽科成立時に郊外の小規模校でも音楽教育を実現するべく考案され、音楽教育会議で発表された教育楽器である。ミーズナーが作成したピアノの教則本『メロディ・ウェイ』は、「すべての子どもに音楽を」のモットーを実現すべく、公立校で 12 人の 8 歳児にピアノを一斉に指導するものだ。米国の音楽教員の集会でデモンストレーションも行なわれた。米国では、このミーズナーの活動記事を起点とし、「グループ・ピアノ」の系譜が約 1 世紀続く。ミーズナーをはじめとする子ども向けの教育システムの後を追うように 18 歳以上を対象とする「グループ・ピアノ」も現れ、今日も大学で音楽を専攻しない学生を対象に開講されている。単位を認定しない・この科目のための特別な受講料を要するなどの特殊な条件を設けたケースもあるなか、学生はどのような動機でピアノに集い、ピアノの学習に何を求めているのか。教員と音楽経験知の異なる学生の「共同」した学びのセーフ・スペースづくり、初習者もとり組む即興・創作・鑑賞（批評）、映画音楽なども含む多様な教材、教室外で学生が音楽に親しむツールの活用など、近年の米国の音楽教育をめぐる議論を視野に、大学の「グループ・ピアノ」の実態と課題を調査・分析する。そして、教育や文化の異なる日本でも、現在よくあるような習熟度別のグループ学習とは異なる、教養教育・社会教育としてのピアノ指導を実現させることを大きな目標として掲げる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 齊藤紀子	４．巻 23
２．論文標題 音楽の文脈からみるヴォーリズ建築：コロラド・カレッジでの学生生活に着目して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 お茶の水音楽論集	６．最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齊藤紀子	４．巻 16
２．論文標題 Ｗ．Ｍ．ヴォーリズが日本の家庭向けに販売した学校教育用ミーズナー製ピアノ：米国と日本の広告比較から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大正イマジュリィ	６．最初と最後の頁 34-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齊藤紀子	４．巻 23
２．論文標題 20世紀前半の米国音楽科教育におけるピアノの一斉指導――0．ミーズナーの教則本『メロディ・ウェイ』（1924）による音楽の総合的指導	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人間文化創成科学論叢	６．最初と最後の頁 131-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齊藤紀子	４．巻 50（2）
２．論文標題 Ｗ．Ｍ．ヴォーリズが輸入したミーズナー製ピアノ考案の背景――20世紀初頭のアメリカ音楽科成立期と器楽の導入	５．発行年 2021年
３．雑誌名 音楽教育学	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齊藤紀子	４．巻 65（2）
２．論文標題 W．M．ヴォーリズの設計した駒井家住宅をめぐる音楽：女学校出身者駒井静江（1890～1973）の音楽実践	５．発行年 2020年
３．雑誌名 音楽	６．最初と最後の頁 137－153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 SAITO Noriko
２．発表標題 Developing Contemporary Non-music Pre-teacher Education in Japan: A Case Study on W. M. Vories
３．学会等名 2024 NAfME Biennial Music research and Teacher Education Conference
４．発表年 2024年

１．発表者名 齊藤紀子
２．発表標題 近江ミッションの音楽・教育活動構想―両洋中学校の視察（1927）に着目して―
３．学会等名 日本音楽学会第74回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 齊藤紀子
２．発表標題 近江ミッションの音楽活動―日本人の参画に注目してー
３．学会等名 日本音楽学会第73回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 SAITO Noriko
２．発表標題 Role of Literacy in Popularization of Music in Japan: Contribution of a Publishing House to the Diffusion of Pianos in the First Half of the 20th Century in the United States and Japan
３．学会等名 Oxford Symposium on the History of Music Education（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 齊藤紀子
２．発表標題 W．M．ヴォーリズが日本の家庭向けに販売した学校教育用ミーズナー製ピアノ――日米の広告比較から
３．学会等名 大正イマジュリィ学会第17回全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 齊藤紀子
２．発表標題 近江セールズで販売されたミーズナー・ピアノ：ヴォーリズの諸活動における音楽を読みとく手がかりとして
３．学会等名 日本音楽教育学会第50回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関